銀鈴第拾九號（每月一回二十日發行）
明治三十七年一月十四日第三種郵便物認可　明治四十年二月二十七日發行

文学結社 銀鈴

第拾九

銀鈴第拾九號掲載目次

銀鈴社詩稿（短　歌）……小川石櫻等
さらばよ古里（散　文）……中村秋泉
永　乾　袖（散　文）……中村とく子
雪　沓（俳　句）……羽風選
枯　草（俳　句）……梧月選
雜　吟（俳　句）……梧月選
丙午の雲石歌壇（評論）……白　箭　朗
伯　水　會（俳　句）……峯秋報
夕　潮（俳　句）……金衣公子社
陽　炎　會（俳　句）……五呑報
春陽雜筆（雜　文）……千代延春圃
俳句募集……
文藝雜俎（評　論）……
社　告……

載轉禁

昨年の詩壇　深編笠
銀鈴社清規……
新年の寄贈雜誌　編輯子
投稿規程……
文界片々　黒華生
廣　告

銀鈴　第拾九號

（明治四十年二月二十七日發行）

銀鈴社詩稿

小川石櫻

みづ色の衣は召さね高どのに月見る人をうつくしむかな

天つ宮春たつらしも白き花間なくとぶなれ師走の空に

翅白

せせらぎの水にしあれど青海の君が胸をつらぬきぬべき

後藤藤朗

白臘の清き衣して一やうに並みつらなりぬ冬の万象

須崎隆一

竹多き里の蒿屋の小障子に灯火さして梅かをるかな

春子

君に然もつけぎの船の帆に書きてかなしき戀を流し遣りなばたはぶれに昔の人とよびも見ぬうち羞しきみけしきなれど

森脇桃村

夕月や梨の花ちる野の家に灯火もせず君待ちて居ぬ

れち方に鐘なるごときひびきして破馬車過ぎぬさびしき街を

和久南江

こころいま君を思ひぬ火吐く山そらに勢の猛なるごとく

菅原紅雨

吹雪する夜なりわかれし日を思ひてつめたき床に涙するかな

冬の園わが蕭條の胸に似しさびしき態を寫すと見もれ

未乾袖

中村とく子

あゝ明治三十九年、そもかのとしはなごて、不幸の、かさなりけむ。

櫻咲く四月のなかば、我は九も親しき友を、失ひたり、夜櫻にうかるゝ人多き迫に、たぼろなる、月のかげを、ふみて、我は友の墓をとひぬ、折から風なきに散りし、落花二片三片、はら〳〵と袂に入りつ。

同じ年の末つ方、木枯さむき夕には、女子師範に學べる、妹の、れくつきをとへば、松風さむう梢を渡りて、殘月一痕、高くかゝれり。

春逝きし人は芳紀二十を二つばかり、こしたりしがすぐるとし高等女學校を、卒へてさる人に嫁ぎ給へり

我が妹は十八才よてもきぬ。身を學事にもだねつゝひだすらに、いそしみていまだ實もむすばざる若木はむなしく冬枯の神の、むごき手に折られつ。

したしき君は、愛嬌したゝるばかりにて、君き〳〵少女の如く一度はちご設け給ひしとも見ねず、いとも花やかなりき、ほゝと笑ませ給ふれんかほの、美しさ思ひ出づるだに、なつかしきよ。

我が妹は、沈默にして言葉少なう、年にも似ずれとなびて、姉なる我れとまがへらるゝこともありき。學びの道に、たづさはるの故なるべし。リボンやかざしやの事には耳もかさず、あたら花のさかりを、ノートと首引して、しづけき室に、こもりしが、むつかしきこゝらの問題とき得し折、わづかにもらすほゝゑみのさても淋しげなりしよ、

かの君は、眞紅を、好ませ給ふこと世の常ならざりき、玉の腕、もるゝ八ツ口に、燃もちらんやうの、もみうら見もるもやさしう、緋縮緬の机掛、もるやかなる前に、筆とりて、歌思びますさまの、いかに艶なりし事よ。

妹はオリーブ色を好みつ、書籍の表紙はもとより、手ならしの箱さては衣類に、いたるまで、オリーブの入れるを用ひたりき、沈めるかれに、眞紅よりは、オリーブ、ふさはしかりしかど、花のさかりの年頃を、さりとは、あまりにあはれならすやと、母君より言葉そゑ給ひしも、あだなりき。かれが最も、愛讀せるオリーブ色の表紙に、金字さやかによまるゝ「心理學教科書」、ありし昔を、語りがほに、殘るも今は、涙のた

ねなりけり。

春風あたりに、みちてもかしき花の香さへ、送るやうの心地せしは、姉ともたのみしたしめる、かの君に面のあたりせる折なりき、ものごとすべてあでやかなるに、消たれて、われはうさもくるしみも、打忘れぬ。今日こそは、親にもつげかねし、心の苦を、うちあけんと覺悟しつゝ、一度むかいては、そのいひいでむ、いとぐちをいづこにも、求め得ざるなりき。

こゝにいたれば、しほらしく、やさしく、常にその弱き身に、れいのさびしさ、みえて、自らくるしみをなぐさむべき、情のこもれるは、妹なりき。よしや、あでやかなる、さまはあらずとも、れとたしくつゝましげなるかれに、接したる我は、なんとなう、たのもしく、思のたけをうちあけて、その同情を求めぬ、さすがにあらそはれぬは、まことの姉妹の情なるかな。

かの君、嫁がせ給ひし後は、我家を、訪はせ給ふ事まれにして、妹も亦夏冬の、休みの間のみ、我家の人にて他郷に、もの學ぶ月日の、多かりし爲共に、語り合ふ折を、得ざりき、さればかれか卒業の、曉を待ちて、紹介の勞を、とるべくたのしみしものを、俄然、かの君と、ながき〳〵、わかれを告げて、同じ年、涙いまだ、かはかざるに、又もや力とせる、妹を、うしなひぬ。

あはれなつかしき、二人よ同じく、死出の旅路に、つくべう高き〳〵、み空を、さして、眞一文字に、のぼりしが、あゝいまいかに、花の如くなりしかの人とやさしかりし、妹と、神のみまへに、あひ逢ひて、うれしく、握手せりやいなや。

枯草（募集句の一）

第六回發表

梧月選

枯草や草履ふみこむ根なし水　峰秋

枯草や赤き實のある鳥の糞　波香

枯草にレール積みたる空地哉　五香

枯草の垣根に赤し寒苺

枯草の焚火あへなし寒習

枯草や草戸の嫁菜芽に出づる

枯草や何に堀りたる穴一つ

天（登賞）

枯草や昨夜葬の捨草履　峰秋

選者吟

枯草に箱の虫糞拂ひけり

丙午の雲石歌壇

白箭朗

（上）

(一)顧みると、已に一年を消費して、三十九年と云ふ一冊の頁は、全く繰り終られた。過去の記述は、更に將來の用意を確かならしむるに足らうと、斯くは覺束なくも筆を執つたのである。

(二)總躰に出雲石見の歌壇が、近頃極めて華々しく振つて來たのは、誰もが認め得る事實であらうし、又、確かに歌人の數、製作の數が、倍蓰したことも、爭はれぬ事實である。

(三)二三年前までは中央歌壇の作物も、この頃のやうに圓熟して居なかつた、惡く云ふと、稚氣滿幅俗臭紛々といふやうな譯で、餘り見ッともよくなかつたのである。

(四)成程構想に新らしい所はあつた、意氣に愛すべき點はあつた。けれども形式が兎角ギシ〳〵して、圭角に富んで居た爲め、生硬だの未熟だのといふ評が頗ぶる高かつた

(五)中央歌壇でさへも、斯樣な躰裁であつたものを、況んや雲石の如き僻在の地方、イヤハヤ情けないものであつた。

(六)無論、地方として古くから最も賑やかなが新濱市。次が京阪ー雲石ー先づ斯ういふ順序に數へられたものだ。

(七)曾つて與謝野寛氏も「島根縣は趣味を同じうする士人の多い所だから一度行つて見たいものだが、何しろ交通の便が惡るいのでー」といふ意味のことを云つて來られことがある。

（中）

(八)歌會として組織されてゐるものには、湖音會、しののめ會、三星社、紫陽社、朱弦會、銀鈴社等、尙ほ二三はあつたであろう。

(九)中にも朱弦會の如きは最も活動したやうに思ふ。而己ならず、發表の歌も比較的整つて居た。

(十)三星會は、僅かに二三者の團結ふしく、歌の數も極めて僅少であつた。作品は常に粗硬幼稚のものが多く、中には噴飯すべき乱暴なものもあつた。

(十一)湖音會は雜多の分子を包容してゐた故か、作歌が不揃千万で、間々所謂座談中語に類するものが交つて居た。然り、甚だ多く。

(十二)紫陽社は朱弦會と等しく、生々の意氣を示してゐたのみならず、作什概ね佳なりであつた。

(十三)銀鈴社は雜誌「銀鈴」や「松陽新報」で極めて多く發表したけれ共、玉石同架の誹は免がれなかつたやうだ。

(十四)しののめ會も相應に活動した、格調やゝもすると、斯の佐々木信綱氏の流派に傾ひて、首肯し難いものが少くなかつた。

(十五)要するに、何れの歌會も相應に振つたことは爭はれぬ。が、佳作と共に平凡無味の作をも併せて有して居た事も亦掩ふべかゞざる事實である。されば今少しく歩を進めて各作者に對する卑見を陳じやう。

（未完）

夕潮

（金衣公子社）

山一脈麓の小田に芹青し　朱絃
綱曳を見に行く沙の小道かな　皎雪
又の日も運座に暮れぬ冬籠　殘月
煤掃や顔黑きもの三五人　痩骨
嫁が君あつたゞ物を貧りぬ　紅星
紅梅を活けて且見る女かな　秋堂
招かれて君が舘に梅を見る　仁子
紅梅や長者が家の奇なる門　醉穗
小田に雪解の水の溢れけり　けい子
白鶴の落葉ふみ居る社かな　韻芳
爐のはたに俳書播く夜寒哉　
新しき電柱たてる枯野かな　きよし
寢られぬ妻が物言ふ蒲團哉　
あふむけに本讀んで居る蒲團哉　
續々と名吟が出づる蒲團哉なか　
磯少女裳裾からげて網を曳く　白星
痩馬の影長々と夕日哉　
炭賣つて駄馬に乘りて歸り鳧　
芹摘んで歸れば うれし友來る　咲子
河原行く馬嘶いて時雨けり　
春雨や半日の興句を作る　
○
このいのち君と語る日つゞばかり惜し
とれもはず信じたまふや　河野翠激
ほととぎす夕かなしき音になきぬ千と
せくだつる君をおもへと　菅原紅雨

春園雜筆

其の六　千代延春圃

12 ▲蕪村の清廉

蕪村は實に清廉の人であった。彼にして若し俳諧を售り、繪畫を售り、以て生計をたてたなら、彼は決して困るやうな事はなかったのだ、けれども、金錢の点については冷かなこと氷の如く、奇麗なこと玉の如しであったのである。それで、沽德浴々の餐澤をすることも出來ず、薪炭米鹽の料に窮する程であった。彼の池大雅など〻彷彿してゐるけれども、妻君は玉蘭のやうではなかったと見えて、時々小言を聞かされることがあつた、其時は所謂、萬事無心一釣竿の流義をきめこんで不關焉と大公望を氣取て一竿の風月を樂しんでゐた、それで時によると四五日も友人の宅で寢起してケロリメカメしてゐる。で、如何に窮したからつて節を賣る樣な安つぽい人間ではなかった、そんな風なので、蕪村の俳畫や俳句は澤山はあつたのだが報酬を得て書いたものは極く少くない、情熱し興發して、鬱勃抑へがたく詩想湧出する時は直ちに筆を下ろすのである。蕪村のかいたもの〻うちで、畫をたしむ一室に訪ふ、あるじ鹿を聞殘して平安に出でたり、一夜留守床に蕉翁山中の吟あり、座上に筆を走らし、俳子三十六哲を寫し、ともに交つて物打ち語る。

とかいてあるのを見ると、例の妻君に小言でも頂載したのであらう、そこで友人を訪ねた處が留守であつた、待つて居る中にふと床の間を見ると蕉翁の吟が目についた、其處で逸興禁じ難くで、直ちに筆を走らして數十枚の俳畫をかいた、そして終夜其三十六哲と俳諧談をしたと、實に詩的といはざるを得んではないか

13 ▲芭蕉の禮讓

芭蕉が曾て磐城平城主內藤露沾公に招かれた。露沾公は煙草が嫌いであつたので、芭蕉は其處へいつても煙草を吸はなかつた。其時例の其角がれともしてゐたのだが、彼樣な風な男なので、歸つてから芭蕉にいふのに全体風雅には貴賤上下の別はないと私は考へて居るですが、貴下はどふです、內藤公の宅へいつて、煙草を吸はないのは權威に阿り媚びたものであるのか、と素的に怒つて尋ねた、すると芭蕉は靜かにそれはお前の量見違ひだ、風雅は決して社會の秩序を乱し、禮儀を破ることはない、社會の秩序、社會の禮儀に從て自分が其風雅の道を守つて行くこそ眞の風雅である汝のいふのは眞の風雅ではない、ほだ風雅といふことがわからぬのだ、といはれて見ると其角も一言もなく自分の粗忽を詫びたといふことである。こ〻が芭蕉の芭蕉たる處である。

14 ▲山相と惡太郎

山相のことを俗にボッタラ又はアクタラといつてるるそれが訛つて惡太郎となつたので、植物であることは黃昏隨筆といふ書に出てゐる。去來の句に

筍や畠隣りに惡太郎

といふ句があるが、一寸解しにくい、先づ普通は、筍が畠に生えてゐる、其隣りに惡太郎即ち徒らつ子が居て今にも抜ぎさうなといふやうに解せられ易いが、それば かりでは畠隣りと惡太郎との間に垣が一重あるやうで物たらぬ、殊に惡太郎に活動がないが、此惡太郎を植物と見てそして擬人法をやつたとすると、實に面白いのだ、これで句も生きて來る。

文藝雜俎

昨年の詩壇（其二）　深編笠

□土野しづく氏は、實際女性かと思ふばかり、優艶な調を獨占して居た。のみならず作家自身が、立場を女の上に置いてゐるふしく見えた、佳作とすべきものが甚だ多い。

□松永清乱氏の格調は、全たく整ふて來たけれども、往年の如く花やかなる風姿ば、再たび見ることを得ぬであらうと信ぜしめた。

□山川登美子增田雅子の両女史は、其發表の數に於ても構想技巧の上に於ても、蓋し伯仲の間にあるものと思ふ。華麗な作も、凄怨な作も、總べて純女性的に出來て居るのが嬉しかつた。

□間島琴山氏は新進の作家である、有望なる作家である。詩才侮り難きものあるを惟ふ。さりながら、氏が諸種の新聞雜誌の懸賞に應ずるが如きは、自ら重ぜざるの太だしきものだと言はざるを得ぬ。

□與謝野寛氏に就ては、我等が彼是いふべきでないけれども、氏の本領は決して短歌といへる狹ひ範圍の裡

に於て論定せらるべきでない。長詩、論文、小說あらゆる文藝の上に、特色を發揮して縱橫無陽の偉觀を極めて居る。餘談に涉るが、氏が文技に至りては、所謂鏡花式、漱石式の如く、遺憾なく與謝野寬式を楮表に躍如たらしめる、言ひ換へれば作家自身の文體又は格調といふものが存在して居ることだ。

それは又手措き、氏が短歌に於て我等の愛誦せるものを擧げやう。

花薔薇しなへて微に息づきぬむかしの人のくちづけの香に

君をもひえ堪へぬ仆にこほろぎも細き音に出づ石のひまより

髮あしく癖しぬ牧の百合原の香を戀ひ日ごと來て寢つるかも

屋をめぐり豌豆さきぬ雨はれず蜂ぞ啼くなる琥珀の巢より

大輪には黃金打ちたりおん料の白駒ならぶ香の樹のもと

君とわが中に香の樹たわ〳〵に赤らたちばな實こそ照りぬれ

あゝ女うへよき欲をれのれ愛でれのれ果敢なみたをやぎて居ぬ

靑立ちし逢は妨るな朝の雨もふべのしづく白くれく見む

其榛もへ命捨てうず下京の西の御堂の佛たのまず

春の月ほのに黃ばめる長緣を行道びとに似て歌ふかな

珊瑚翡翠差扇なふべぬ北の空夜を守る星の七少女ども

路ぞ入る上葉黃に染み直立の幹ども白き山の木原に

木の葉ちる夜寒となりぬ山馳せてよよとし泣けりわかき染姫

溝闇の黍の壑ふく風の間に打つ音きこも馬のあしがね

蔓もごき琥珀の枝に巢隱れて山に母よぶ小雀女の雛

逸樂はをびやかし來ぬ降人とわれかなし笑みてまからむ

（未　完）

新年の寄贈雜誌

編輯子

△藻の花　行餘會誌といへる雜誌中內藤鳴雪選なる下に列せられたる俳句は、固と翁が認容せざるものある事を以て、同會に質せる一文あり。俳句及び寫生文二三を載す。

△紫陽花　短歌專門の雜誌といふも可なり、格調は窪田通治氏に類し十月會詠草百余篇を揭ぐ

△御國　卷首に兩陛下萬歲の文字を揭げたるは、二十年前頃の雜誌にでも倣へるならん乎、舊派の俳句を載せたるも宜なり。

△朝虹　新躰詩和歌などはお咄になつたものにあらず標本一つお目に懸くべし。

身にかへて君が病ひを祈りたるあはれの人も

ありとればせな

△スズムシ　三尺劍に「銀鈴の中身には何時も黃色の紙が使つてある、妙な好みだ」と本誌に就て曰へるあり。之を揭載せし記者に云ふ「柴田淸美や正富汪洋を崇拜するも妙な好みだ」と

△五月　寫生文數篇あり、俳句は孰れも精選せられたるものゝ如し、表紙画は名古屋東照祭の圖。

△シブキ　見るべきものは笑波生の土、龍、打ち、と募集句のうちの二三と。

△若葉籠　躰裁を大版とし表紙画を石井柏亭氏の時代風俗に改め欄画を挿入したりと雖も、內容依然舊態を更へざるは口惜し、本誌の和歌を評して「未だ評するに足らず」と曰へるは評論を聽かざる陋り、首肯し難きものに屬す。

△あけぼの、明ボノ　名は同じけれど發行所は違へり似たり寄ったりの三文雜誌。とは少し言ひ過ぎたり。

△山鳩　ワカバと合同せり、表紙画を改む有松十葉の筆。いつ讀みても厭なは金子薰園三木露風土岐湖友野口安等の和歌なり。嬉しきは石島薇山深山景林豐島幽陰小木曾旭晃等の論文及華園雉子朗等の俳句あり。

△新潮　神戸文學小史今樣妻君失戀記夏は行く師走の巷有爲倶樂部等何れも興あり、水蔭の背中合せ掬汀の旅すがたは作者の名を買ふまで。くち子の六號長詩宜しく抹削すべし。

△宇宙　漸次改良の痕見えて嬉し。表紙画を改めたる紙數を增したる、甚だ可し。

△文華　中學一二年生對手の雜誌なるべし。

文界片々

黒華生

◎詩人薄田泣菫氏は舊臘より京都に移住し創作に餘念なしと傳へゝる。

◎都新聞社は千六百圓を、大坂朝日新聞社は二千五百圓を懸けて、いづれも脚本を募集中なり。

◎戸澤姑射氏の「リヤ王」は最も苦心せる飜譯なりと云ふ。沙翁全集の刊行は仝氏等畢生の大事業なるべし。

◎夏目漱石氏の「緣」來月の。雜誌「ホトトギス」に出づべし。一部の讀書子亦乂狂喜せむ

◎登張竹風氏の「島の聖」、衆口一致不評判に終る。寧ろ評論壇に於て、氏の眞拔量を見むかな。

◎田口掬汀氏の脚本「熱血」本月の「萬朝」に出づ。完結の上は、小栗風葉氏の「天才」續載せらるべしと。

◎角田浩々歌客氏は爾後雜誌「明星」に所感隨筆を連載すべし。

◎「文藝界」は新年より「家庭文藝」と改題して、家庭に文藝趣味を注入せむことを期せり。主筆は伍々醒雪氏、果して能く成功すべきや否。

◎青柳有美氏は秋田縣中學の教職を辭し東京に入りて實業に身を投じたりりと。但餘暇小説を稿しつゝあ。

さらばよ、古里

枯芦痛々しう水面にひれ伏して秋風すゞろ悲しき音を塡え、貫き敢へぬ白露しとゞ江に滿てる夕を懷かしき數々の追懷に富める故里に永別を告ぐべく吾は今し小西湖畔をさすらえるなり。万象肅として病葉を翻す風のぞめき、逝きもく水の和語、騷立つ野の聲、夢と流るゝ雲の啓示、一として幻に醉へる吾内神を攪きまぜて天眞の我に醒めよと宣る聖き御旨ならざるはなきを世の人は只寂寥と呼び悲哀と號ぶ。

あゝされど、我には何の寂寥かあらむ、悲哀かあらむ、否寂莫悲寥は詩神に通ずる不斷の好餌たるなり。見すや、油と和げる湖心の折節誘ふ風の接吻に淋しみの、さりながらそこに謂不知慈愛を含むほ、笑を、亦聞かずや小草に培ひ小石にせゝらぐ水の音は收穫の秋を言祝ぐ神の使命なるを。是をしも寂滅と嘆き悲哀と血泣すべくむば、人の世の物なべて無常の種ならざるものあらむや。さなり大なる自然は雪月花四季れり〳〵の虚飾なき美と啓示を吾人の眼前に展じて人世の希望と懷想と吟哦を遺るべき表彰を指示せるなり。

吾は是の大自然に抱擁せられて、人の世のけがれを

ひ罪なき想に恍惚として、平和と慰藉に玉兎の歓滿を眺めし年茲に廿年！

多謝す、山よ川よ湖よ野よ森よ、汝ありてこそ過去の我ありしなれ、人の世の不常を嫌み、呪ひ、不滿を抱ける我の今万有を繞ぐる雲の如く、逝きもく水の流れ流るゝ飄遊生活の首途を告ぐべく低廻覦望涙の袖にひぢぐを知れりや。想ふ吾廿年の昔、貧と涙の生活を味ふべく呱々の聲を人の世に擧げてより前途に湧き立ちし幾重の波瀾に弄翻せられ轉た氣も衰へ心狂して、有らゆる悲慘と煩惱とを訴へて正しき判別をねぎしも汝に非ざりしか、慰藉と平和に塵の吾を救ひ、再び人世の戰場に勇氣と決斷を附與せしも汝に非ざりしか。

れゝ、西湖よ、何すれば應答なくして沈たり默たるや透徹五尺の底の玉石も數へつべき湖水は僅に笑めるのみ。

折しも風一しきり〳〵行くこと迅ふ、落葉片々肩を打つて、落暉山の端を射て淡く、谷々は早くもねぼろ〳〵の暮の幕。

「あゝ、甚麽してこの慰藉の花を見捨て得べき」

想望と追懷の過去を損て、實施と開拓に身を委ぬべき破目に立ち至れる吾行末は果して幸なるべきか、將たなつかしき古里に背き、微志を蓄へて今夢の如き希望に憧憬るゝ吾命運は果して是なるべきか、しかも其是と其非とに關せず人事は斯く强もるなり、世運は斯くせまれるなり。淪落輒軒の半世を泣かむも今日限り、明日よりは行衛定めぬ浮萍の、あわれ東に咲かむか西に枯れむか。

「れゝ、さらばよ古里！永久に幸きくてあれな」

世は暗膽と、はや「沈默」より「死」に落ちて、蟲々と蒼空を攫する森の立木は紫色に煙りて、さながら逢遭の奇なるを嘆くが如、夢とほの白きは水面のそれか、何處よりともなき夕の鐘は森を縫ひ、水面をかすめて、虚空にもるく縷のごと搖曳して、少さき靈を誘ふが樣。

涙は、止めどなく、はら、頻に袖に、見仰くる御空は寂莫として無韻の星屑さながら常世の花の春。

次號原稿〆切三月十日

雪 沓（募集句の二）

第六回發表

羽風選

藁沓の雪かき落す矢尻かな　峰秋
雪沓の音珍らしく人や來し　五呑
雪沓や束ね掛けたる泥の足袋
雪沓や猪脊負ひたる山男
雪晴れて雪沓干すや小柴垣
雪沓や古りて佗しき水のもれ
雪沓の鍛冶場に憩ふ飛火かな　波舍
雪沓を干せし日向や楮蒸す
雪沓を枝にかけたり梅の晴
雪沓や腰に釣りたる山刀

雜吟

月選

梧月　福壽庵
我戀も昔となりぬ玉子酒
寒月や鉾杉高き山の寺
枯菊や夕日冷き亭の道　峰秋
棗喰つて會心の句を得たり鳧
師の湯婆借りて留主守る霜夜哉
三更の鐘聞き湯婆は冷えに鳧
洛外に無住の寺や枯柳
鑛毒のこゝまで及ぶ枯野哉
蟷螂や竹馬すてし草の上
蟷螂や客の脱ぎたる簑の上
隼に追はる、鳥や夕野分　村雨
夕野分貧しき柩通りけり　五呑
匍匐ふて野分の橋を渡り鳧　山笑
鶏頭に西日うする、野分哉　旭水史
稻妻の添ふ竹藪の野分哉　雲桂樓
野分過ぎて山下の旗亭灯し鳧　五呑

▲懸賞俳句募集　（〆切毎月十日）

△課題春季　雜吟△二十句以下△選者羽風梧月共選
△同一の句二通に明記△天地人六名へ本誌一ヶ月分贈呈直接購讀者は前金中に加算　△銀鈴社宛

▲社告。和歌初學者のために添削返草の途を開く。希望者は題隨意一ヶ月二十首以内半紙に淨書し、石見國邑智郡田所村本誌記者菅原正男宛て、返草用貳錢切手添附送稿ありたし。一週間以内に修補の上返附すべし社友と否とを問はず料金を要せず。請求に依りては本誌上にも掲載す。

▲社告。次號より和歌と俳句に關する感想を募集す。一般の〆切期日に準じ、續々寄稿せられたし。

▲寄贈新刊。紫陽花七ノ四〇若樓二ノ十二〇あかつき七ノ八〇明ポノ九〇迪俗二の一〇藻の花三ノ十〇行餘會誌二の一〇交學一ノ五〇五月四ノ二

▲伯水會五句集（出雲）　峰秋報

課題牛（秋結）

出句者十四名總句數七十句七句互選結果十三点玄子峯
秋十一点不羈十点嘯月九点不弔七点梅窓五点山笑（畧）

七点　牛に乘つて仙童藥堀りに行く　峯秋
六点　鬪牛の廣き矢來や秋の風　不羈
四点　病む牛を日南に繫ぐ穗蓼哉　玄子
同　牛放つ御料の原や草紅葉　同
同　夜さむさや牛の寢返る藁の音　嘯月
同　牛の乳搾る垣根や木槿咲く
同　灯して牛の顔見る夜寒かな　山笑
同　院の庭銀杏吹き散る牛車　不弔
三点　牛塚やむら立つ草になく蚯蚓　不羈
同　牛すねて動かぬ朝の寒さ哉　峯秋

▲陽炎會五句集（岡山）　五呑報

野分の卷、出句者三十二名選者二十名、十八点五呑十四点山笑十一点芦曲柳盡星宇九点雅村村雨八点無聲旭水史七点桃村翠峯城碧山峯秋雲桂樓以下畧

七点　野分して晝を閉せる草の家　五呑
六点　赤々と日の入る中を野分かな　芦仙
同　夕空や野分を孕む走り雲　霜月
五点　江東に一鳥急ぐ野分かな　柳盡
同　藁砧畑の野分を夜もすがら　雅村

銀鈴社清規

一　文藝を愛するものは何人と雖も本社社友たることを得べし
一　社友は銀鈴誌代六ヶ月分以上前納者たることを要す
一　社友は社内同人を經て本誌編輯其他の議に參與することを得
一　社友には有効期間毎月銀鈴を無代配送すべし
一　支部（社友五名以上）社友は本社直接の社友と同一の待遇を得べし

投稿募集

一　和歌　一　俳句　一　美文
一　小說　一　評論文　一　長詩
一　小評　一　小品文　一　社友月旦
一　文壇消息　一　歌會句會の詠草

用紙は半紙一枚二十行とし一行二十四字詰。種類を異にしたるものは各別紙に認むる事。〆切は毎月十日。投稿は其幼稚なるものと雖も可成補正採用す。秀逸なるものは社中同人の議を經て薄謝を贈る。社友以外と雖も投稿隨意但賞を贈らず。

謝告

本誌本號の原稿は例月の通り九月十九日編輯を終り直に本社印刷所に送致せり然るに仝印刷所の失態に依り發行期を遲るること一旬を過ぎ本日に及ぶ罪は則ち印刷所にありと雖も本社亦其の責を免るる能はず切に社友及び愛讀者諸君の寛恕を乞はんとする也謹んで謝す

銀鈴社

銀鈴第拾九號（毎月一回二十日發行）
明治三十七年一月十四日第三種郵便物認可　明治四十年二月二十七日發行

○廣告

見よ!!! 潮光會の大奮發

本會は創立以來茲に滿一週年而も機關雜誌〔潮光〕は号一号と大改良をなし今や地方文壇の中堅を以て自任するに至れりこれ偏に諸君の助力によるものにて即ち本會は茲にいさゝか諸君の厚意を謝する爲三月一日發行の第二卷第三號を三千部限り郵券貳錢封入申込者に無代進呈す至急申込あれ

發行所　千葉縣銚子港　潮光會

銀鈴定價表

定價	郵稅
一部　金五錢五厘	金五厘
六部　金參拾錢	……
十二部　金五拾五錢	……

廣告料
一行五號活字二十四字詰貳拾錢半頁貳圓
郵券代用壹割增

銀鈴第拾九號

明治四十年二月二十五日印刷
仝　四十年二月二十七日發行

島根縣邑智郡田所村大字下田所七三二
編輯兼發行人　河野岩雄
仝　縣仝　郡川本村大字川本五三八
印刷人　原八太郎
仝　縣仝　郡仝　村大字　仝　五三八
印刷所　邑智活版所
島根縣邑智郡田所村
發行所　銀鈴社